

『就実教育実践研究』第14巻 抜刷
就実教育実践研究センター 2021年3月31日 発行

小学校長による「論語」を基にした総合的教育実践 — 全校児童の人格的成長のために —

**Comprehensive educational practice based on "The Analects"
by the elementary school director:
For personality development of all the students**

山部英之・山田美穂

小学校長による「論語」を基にした総合的教育実践 — 全校児童の人格的成長のために —

山部英之（就実小学校）、山田美穂（教育心理学科）

Comprehensive educational practice based on "The Analects"
by the elementary school director:
For personality development of all the students

Hideyuki YAMABE (Shujitsu Elementary School) , and
Miho YAMADA (Department of Educational Psychology)

抄録

本論文は、小学校の全児童を対象として校長が継続的に行っている「論語」を基にした教育実践についての報告である。初年度である令和2年度の取り組みについて、実践開始までの経緯、実際の実践内容についての検討、1年生が書いた「ふりかえり」の分析を通して、(1) 論語の教えや魅力を小学生に効果的に伝えるための工夫、(2) 論語を基にした総合的な実践が児童の人格的成長にもたらす効果の2点について検討する。本実践の特徴は、論語を短いことばで示すこと、手作り教材の活用、発達段階に応じた講話の工夫、実践の多層的構成、そして弾力的で柔軟な展開にあった。本論文では、そのような実践の中で児童が論語から主体的に学び、自らよりよい人格を目指して成長しようとしていること、さらにその基盤となっているのが校長と児童との「心のふれあい」であることを示した。

キーワード

小学校長、論語、手作り教材、総合的教育実践

I はじめに

1 就実小学校の教育活動

平成27年4月に開学した就実小学校は、令和2年度に初めて1年から6年までの全学年が在籍し、全校児童254名で新年度のスタートを切った。

本校は就実学園の建学精神「去華就実」のもと、学校教育目標を「グローバル社会の担い手として 未来をつくる就実の子を育む」と掲げ、「かしこい子(知)」「やさしい子(仁)」「たくましい子(勇)」「誠実に生きる子」の育成を目指し、特色ある教育に取り組んでいる(図1)。具体的には、「英語イメージ教育(English、Math(算数)、Art(図工)、P.E.(体育))」「本ものにふれる教育(書道、茶道、自然体験等)」「先進的なICT教育」を推進し、国語・英語等の言語能力、情報活用能力、思考力・判断力・表現力、学びに向かう力、人

間力の育成に取り組んでいる。

論語は、今から約2,500年前に中国の孔子の言葉等をまとめた書物であり、現在においても多くの人々に読まれている古典である。上に挙げた学校教育目標も、論語を基に作られている。「かしこい子(知)」は「知者は惑わず」、「やさしい子(仁)」は「仁者は憂えず」、「たくましい子(勇)」は「勇者は懼れず」が基になっている。



図1 就実小学校経営方針

学校教育における論語の活用について、岡山県教育委員会では平成26年3月に『学校教育で活用できる論語章句集』⁶⁾を発行し、具体的活用事例を掲載して県内公立学校へ提示している。本校においては、論語は学校教育目標の根幹となる教えであり、論語を学ぶことにより、児童一人一人が学校教育目標(目指す子供像)の具体的な内容やあるべき姿を意識することができるのではないかと考えた。

そこで、校長である第一筆者はこの論語を、児童の発達段階に応じて親しみやすく紹介する活動を通して、児童の人格形成、就実小学校が目指す「グローバル社会の担い手として 未来をつくる就実の子」の育成に取り組んでいきたいと考え、総合的な実践を行うこととした。

2 本論文の目的

本研究では、就実小学校における令和2年度の取り組みを振り返り、実践者である校長が工夫改善した点を整理すること、併せて、児童の反応を分析することにより、人格的成長のための総合的教育実践の成果と課題を明らかにすることを目的とする。本論文のリサーチ・クエスチョンは以下の2点である。

- (1) 論語の教えや魅力を、小学生に効果的に伝えるにはどのようにしたらよいか
- (2) 論語を基にした総合的な指導は児童の人格的成長にどのような効果をもたらすか

II 本実践を始めるまでの経緯

1 実践者（第一筆者）と論語とのかかわり

第一筆者は、岡山県の小学校教員を平成31年3月末に退職後、4月に就実小学校校長に就任した。「笑顔」「バイタリティ」「プラス思考」がモットーである。毎朝正門に立ち、登校してくる子供たちを出迎え、子供たちの気持ちのよい「おはようございます!」に、「素晴らしい」「礼儀正しいね」と声掛けする活動を続けている。また40代の頃より「論語」³⁾を愛読し、日々の生活の中で自分自身の行いを振り返る指針として位置付けている。

2 前校長からの引継ぎ

本校開学時から令和元年度までの5年間は、前校長である森熊男先生が実践されていた。

令和元年11月に、森前校長より「来年度からの論語は山部先生にお任せします」と言われ、第一筆者は自分自身が今一度、論語そのものおよび具体的な活用方法等について研修しなければならないと考えた。大きな問いは「論語の教えや魅力を、小学生に効果的に伝えるにはどのようにしたらよいか」であった。

そこで、これまでの経過並びに現状を分析すると、具体的な検討課題として以下の4点が浮かび上がった。

- (1) 論語の活用の方法：教育課程への位置づけ（学校あるいは家庭で、どの時間に行うか）、論語の章句の長さ（長めがよいか、短めがよいか）、唱え方（個人か全員か）、回数など
- (2) どのような論語を活用するか
- (3) 親しみやすい論語プリントの作成：パソコン文字か筆文字か、配付回数
- (4) 発達段階に応じた論語の活用：全学年同じ内容にするか、あるいは4年以下と5・6年に分けるか

3 「論語指導士」講座受講と資格取得

そのような時に、インターネットで「論語教育普及機構（一般社団法人）」が行っている「論語指導士養成講座」Webページ⁷⁾を見つけた。この講座は、論語の基礎知識から本文の解説や背景など幅広い内容をわかりやすく講義するものである。前述したように第一筆者は20年前から論語を本格的に読み始めたのだが、その本の著者が本講座の講師であ

ることに驚き、「縁」のようなものを感じた。そのような理由から、本講座をオンラインで全24回受講することにした。テキストは『論語のこころ』⁵⁾、『ビギナーズ・クラシックス 中国の古典 論語』²⁾、『論語 増補版 全訳注』⁴⁾、『子や孫と読みたい日常語訳 beポンキッキーズの論語』¹⁾であった。そして令和2年1月25日に大阪で実施された「論語指導士資格認定試験」を受験し、令和2年2月16日付で「論語指導士」資格を取得した。研修を通して、論語の活用に関して次のようなヒントを得ることができた。

- (1) 短い句を抜き出す：「これは！」と思う短いことばを選んで、それを読ませる方法がよい。
- (2) テキストは独自に作成する：自分で論語を読み、自分で選んで作る方法がよい。子供のためにテキストを作ることによって、自分の勉強になる。
- (3) パソコン文字よりも手書き文字：論語の短い句を墨書し、テキストを作成することにした。

4 コロナ休校中の準備（令和2年4月18日～5月24日）

令和2年度は、当初計画通り4月8日（水）に第1学期始業式、10日（金）に入学式を行い、4月17日（金）まで2週間授業を実施した。その後全国一斉に緊急事態宣言が発令され、約1か月間、臨時休校とした。

第一筆者はこのコロナ休校の期間中に何かできないかと論語を読み返し、次の事に取り組んだ。

(1) 論語復習プリント配付（オンライン）

2年生から6年生の児童に対して、昨年度学んだ論語を、学年毎にプリントに印刷し、家庭で毎日読めるようにオンライン配信した。

(2) 1年生用論語プリント配付（オンライン）

入学したばかりの1年生児童に対して、「はじめてのろんご」をオンライン配信し、親子で唱えるよう保護者に依頼した（図2）。

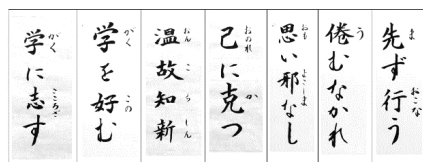


図2 1年生用論語プリント

Ⅲ 論語を基にした教育実践内容

1 具体的な実践の枠組み（令和2年5月25日～12月9日）

1) 全校朝会（毎週月曜日8：25～）

- (1) 「今週の論語」を紹介する。
- (2) 前週の論語をクラス全員で唱和する様子を録画したものを再生し、賞揚する。「今週の論語プリント（児童配付用）」を準備するとともに、各教室に第一筆者の直筆による「今週の論語（墨書）」を掲示する。

2) 就実タイム (8:25~8:35)

火曜日はある学年のA組、水曜日は同学年のB組、というスケジュールを組んで、第一筆者が教室を訪問し、論語の講話を行い全員で唱和する(図3)。その様子を録画し、次週の朝会において紹介する。



図3 就実タイムでの第一筆者による講話

3) 家庭学習

毎日3回素読し、週末または翌週に「ふりかえり」を書いて提出する。短時間で毎日行う形式にし、児童が興味を持ちやすいようにした。1~4年生は短い句の抜き出しを読むことを中心としたプリント(図4)、5・6年生は担任教諭からの意見を基に文字数を増やしたプリント(図5)を作成し、総合的に展開した。第一筆者は提出されたプリント全てに目を通し、「ふりかえり」へのコメントを記入して返却した。

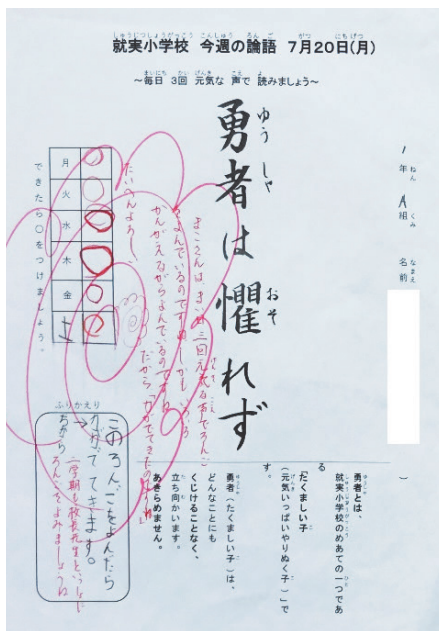


図4 1~4年論語プリント

就実小学校5・6年生 今週の論語 10月5日(月)

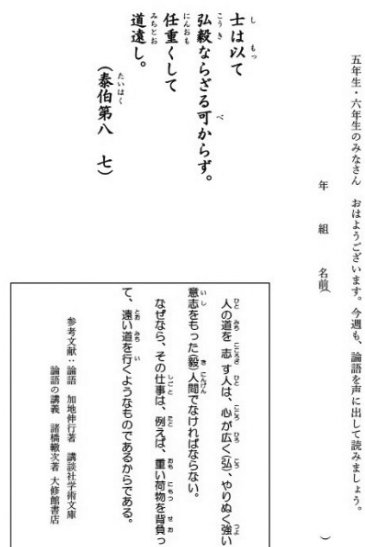


図5 5・6年論語プリント

2 「就実タイム」の全容

表1に、本年度就実タイムにおける論語の講話内容を示す。第一筆者は6月から12月まで、40回以上全学年の教室に行き、児童に論語を通じてさまざまな内容の話をした。

表1 令和2年度 就実タイム（8:25～8:35） 論語スケジュール

回	月日	学年組	論語 講話内容	回	月日	学年組	論語 講話内容
1	6月4日	6A	君子は本を務む	23	9月15日	2A	行くに徑に由らず
2	6月5日	6B		24	9月16日	2B	
3	6月9日	5B	われ日に吾が身を三省す	25	9月24日	5B	温故知新と感染症 新型コロナウイルス
4	6月10日	5A		26	9月25日	5A	
5	6月16日	4A	ひろく衆を愛して 仁に親づけ	27	9月29日	1A	学びて思わざれば すなわち罔し
6	6月17日	4B		28	9月30日	1B	
7	6月24日	3A	事に敏 言に慎む	29	10月7日	6A	士は以て弘毅ならざる 可からず
8	6月25日	3B		30	10月8日	6B	
9	6月30日	2A	礼の用は和を貴しとなす	31	10月13日	5A	之を導くに徳を以てし
10	7月2日	2B		32	10月14日	5B	
11	7月7日	1A	知者は惑わず	33	10月20日	4A	切磋琢磨
12	7月9日	1B		34	10月21日	4B	
13	7月15日	6A	仁者は憂えず	35	10月27日	3A	われ日に吾が身を三省す
14	7月16日	6B		36	10月29日	3B	
15	8月27日	5A	温故知新	37	11月11日	2B	之を知る者は之を好む 者に如かず
16	8月28日	5B		38	11月13日	2A	
17	9月1日	4A	博く学んで篤く志し	39	11月25日	1A	君子は人の美をなす
18	9月2日	4B		40	11月27日	1B	
19	9月3日	6A	温故知新と感染症 新型コロナウイルス	41	12月1日	6A	徳孤ならず 必ず隣有り
20	9月4日	6B		42	12月2日	6B	
21	9月8日	3A	切に問うて近く思う	43	12月8日	5A	己の欲せざる所 人に施すこと勿れ
22	9月9日	3B		44	12月9日	5B	

3 実際の講話① 「論語とは」「論語を学習する目的」（全学年）

第一筆者は6月から7月にかけて、「論語とは」そして「論語を学習する目的」をテーマに児童に話をした。『超訳！ こども名著塾1〈論語〉孔子〈老子〉老子』¹⁰⁾を参考に準備した内容は以下のとおりであった。

1) 論語とは

「論語」は、今から約2,500年前に、中国の孔子という人のことばをまとめた本です。孔子は、おおぜいの弟子たちに、「学んで自分を成長させ、よりよく生きよう」と語り続けたのです。そのことばである「論語」は、中国や日本で、人としての生き方や社会のルールを教えてくれる書物として、とても大切にされてきたのです。日本には、五世紀ごろ、朝鮮半島（今の韓国・北朝鮮）から伝わってきたといわれています。それから1,500年以上たった今でも、多くの人に親しまれている本です。

2) 「論語を学習する目的」

就実小学校の学校教育目標は、論語をもとにしてつくられたものです。みなさんも論語を唱えて、かしこい子、やさしい子、たくましい子、誠実に生きる子 になりましょう。

スライドも示しながら（図6）このような話をすると、どの学年の児童も大変驚いており、論語に対する興味関心が高まってきたように感じられた。

3) 児童の感想

以下は、6月9日（火）の就実タイム（論語）で第一筆者の話を聞いた5年生児童の感想である。

「ぼくは、就実小学校の学校教育目標が論語からきていると初めて知りました。かしこい子は知、やさしい子は仁、たくましい子は勇です。そして、なぜ論語には仁という言葉が出てくるのかわかったような気がしました。そして、これからも就実小学校の教育目標を目指して生活したいです。」

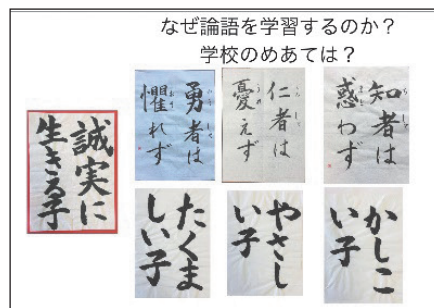


図6 論語を学ぶ目的（スライド）

「今日は、論語と学校教育目標について教えてくださいありがとうございました。私は1年生の時から『何で論語を習うのだろう』と疑問に思っていました。その疑問が、今日校長先生のお話を聞いて解決できました。また論語を教えてください。校長先生の習字の論語が大好きです。」

4 実際の講話② 感染症と温故知新（5年生・6年生）

1) 計画変更のきっかけ

5年生と6年生は、2学期初めに「故きを温めて新しきを知る。以て師たるべし。（温故知新）」という論語を学習した（図7）。9月第1週の就実タイムでは、6年生の両クラスに行つてこの論語の意味について説明し、一緒に唱和する予定だったが、急遽計画変更をした。そのきっかけは、第一筆者が参加していた山陽時事問題懇談会だった。7月28日の同懇談会において、岡山大学名誉教授森島恒雄先生が「新型コロナの第2波に備えて—診断・治療の最前線—」という演題で講演をされた。その中で、「感染症と温故知新 天然痘」という話をされた。その内容（概要）は次のとおりであった。

○天然痘も感染症の一つで、紀元前より、伝染力が非常に強く、死に至る疫病として人々に恐れられていた。

○日本では、聖武天皇の時代に天然痘の感染拡大が起こり、聖武天皇は仏教の普及と天然痘大流行の鎮静化祈願を目的に奈良東大寺大仏殿を建立した。

○1798年、イギリスのジェンナーという医学者が世界で初めて天然痘ワクチンを開発した。
 ○1849年、日本にもその技術が伝わり、天然痘の治療が始められた。その後、岡山出身の緒方洪庵が大坂で治療に当たった。
 ○最も重要な事実は、ワクチンがわずか数十年で世界に広がっていったことである。その背景には、世界中の医療者の「天然痘（感染症）に対する共通の危機認識と、克服のための担当者の熱意と協力」があったということである。
 ○はるか昔から、国を越えて「天然痘から人々を救おう」という視点が共有されていた。

就実小学校 5・6年生 今週の論語 8月31日(月)



図7 5・6年生用「今週の論語」

2) 講話の内容

そこで第一筆者は、森島先生の講演に加え、立花隆による「鎖国時代の緒方洪庵から学ぶこと」の論考⁸⁾を参考に、緒方洪庵について紹介し、以下の話をした。

○緒方洪庵の時代は鎖国をしており、世界の情報が全く入ってこなかった。しかし、洪庵たちは、外国語や外国の進んだ技術などを必死で学び、のちの明治維新によって新しい日本をつくった。

○現代も海外へ行って勉強しようという人は減ってきている。鎖国時代と似た状況である。これを変えるために必要な能力は、「日本語力」「英語力」「ICT力」「読解力」である。

6年生の児童は第一筆者の話を真剣に聞いていた。なお、5年生の児童にも、9月24日(木)・25日(金)の就実タイムの時間に同様の話をした。

この講話を通して、児童一人一人が昔の人々の熱意に感動し、昔と今とがつながっていると気付くことができたということが、以下のような感想からうかがえた。

3) 6年児童の感想

「江戸時代にオランダ語を勉強し、完全に使いこなすことができる緒方洪庵という人はとてもすごいと尊敬します。自分も何か人のためになれるような人間になりたいと思います。」

「昔の天然痘と今の新型コロナウイルスの感染拡大する様子がとてもよく似ていると思いました。昔の人はあらゆる知恵を振り絞って感染症から逃れてきたということが分かりました。ぼくは、これからも温故知新という言葉を大切にしていきたいです。」

5 実際の講話③ お年寄りからの手紙

1) 講話の内容

10月27日（火）・29日（木）には、3年生のクラスの就実タイムで指導を行った。まずその週の論語「われ日に吾が身を三省す」（図8）を全員で唱和し、次のような話をした。

「先日、2年生児童が杖を忘れて公園に来ておられた近所のお年寄りの方に、自分から進んで杖を取りに行ってきた、お年寄りの手にその杖をにぎらせてあげた」ということで、感謝の手紙が届いていた。10月26日（月）の放送朝会で第一筆者はその手紙を紹介し、思いやる心・優しい心（仁）の大切さについて話し2年生児童を賞揚していた。

実は、その手紙には続きがあったのである。それは以下のような内容であった。

「何と心やさしい、よく気をつく子供に一瞬はっとしました。私は自身をふり返り、若い時20年も病院つとめをしていて患者様にこの様な気遣いが出来ただろうかと反省し、子供に教えられました・・・」

このお年寄りの手紙の内容が「われ日に吾が身を三省す」と同じであることを説明すると、3年生の児童は非常に驚いていた。この論語の意味を実感としてとらえることができたようであった。

2) 3年生児童の感想

「校長先生のお話から学んだことは、『われ日に吾が身を三省す』です。最初はこの論語の意味が分からなかったけれど、校長先生のお話を聞いてその意味がわかりました。ぼくはこの論語を読んで、毎日自分のしたことについて、何回も反省しようと思いました。」

IV 1年生の「ふりかえり」の記述

本節では、本実践の開始時に入学した1年生の反応に焦点を当て、小学校での学習の始まりと共にはじめて論語に触れた児童たちがどのように本実践を体験し、どのような成長を示したのかということについて検討する。学習の「ふりかえり」として児童が自由に記述した文章をデータとし、内容とその変化について分析する。

1 方法

1) 分析の対象

1年生2クラスの児童が「今週の論語」プリント（図4、8）の「ふりかえり」欄に記述した言葉や文章をデータとした。1学期開始時から2学期中盤まで、第1週～第17週の

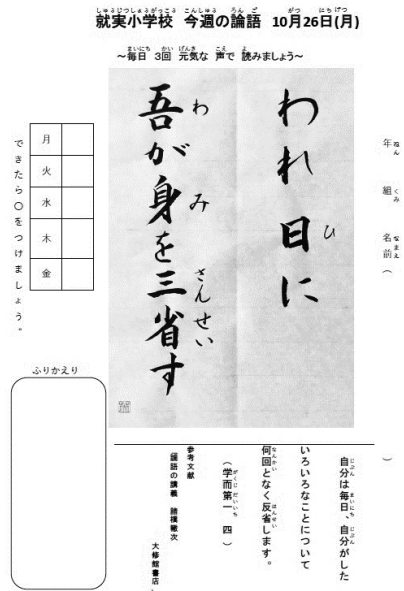


図8 「今週の論語」10月26日

プリントを対象としたが、夏休み用の復習プリント（2週分）は含めていない。また保護者によるコメントは分析対象から除外した。記述データの総数(延べ人数)は573であった。プリントが提出されなかった分や返却前に転記できなかった分などはデータとして収集していないため、各回のデータ数や提出者にはばらつきがあるが、5月1日時点での在籍児童数49人に対するデータ収集率は68.8%であった。

2) 分析手続き

全記述データの内容を比較し、意味内容が類似しているものをカテゴリー化して、計8つのカテゴリーを生成した。1つの記述に複数のカテゴリーに該当する内容が含まれているものもあり、1記述あたりのカテゴリー数は1～5であった。全17週をおよそ1か月ごとに4期に分け、分類されたカテゴリーの総数に対する各カテゴリーの比率、1記述あたりの平均カテゴリー数および平均文字数を算出した。

2 結果

「ふりかえり」の記述データ数を表2、分析の結果得られたカテゴリーと記述例を表3、カテゴリー数など主な数値データの概要を表4、各期のカテゴリー総数に対する各カテゴリーの比率内訳を図9に示す。

第1期は小学校での学習が始まったばかりの時期であり、提出された「ふりかえり」の総データ数は68、1回答あたりの文字数も14.8字と少ないが、第2期から総データ数は大幅に増えて各クラス毎週20人分程度と安定し、文字数も第2期17.8字、第3期23.5字、第4期26.4字と増加し続けている。

表2 「ふりかえり」記述データ数

期 (総データ数) (平均文字数)	週	開始日	クラス	
			1 A	1 B
第1期 (68) (14.8)	# 1	5月25日	5	—*
	# 2	6月1日	9	6
	# 3	6月8日	11	—*
	# 4	6月15日	18	19
第2期 (201) (17.8)	# 5	6月22日	20	22
	# 6	6月29日	21	19
	# 7	7月6日	20	19
	# 8	7月13日	22	21
	# 9	7月20日	20	17
第3期 (172) (23.5)	# 10	8月31日	21	23
	# 11	9月7日	21	22
	# 12	9月14日	22	20
	# 13	9月28日	21	22
第4期 (132) (26.4)	# 14	10月5日	5**	22
	# 15	10月12日	9**	10**
	# 16	10月19日	22	22
	# 17	10月26日	20	22

*データの記録なし

**データ数は提出された分の一部

表3 カテゴリー名と記述例

カテゴリー名	記述例
【とまどい・難しさ】	「これはむずかしいことばですね」
【課題の達成感】	「かみをみずによめるようになりました」
【楽しい・好き・感動・カッコいい】	「ろんごはわくわくします」
【行動目標としての内面化】	「こみちによらずのやくそくはぜったいにまもります」
【素読の快感・活性化・落ち着く】	「わたしは、ろんごをよむと、すごげんきになります」
【実体験の内省】	「ちょっとだけずるしちゃったけど、まあさいきんはずるしていないかもしれないとおもいます」
【教師・学校への信頼・感謝】	「こうちようせんせい、今までたくさんのろんごをおしえてもらって、たくさんろんごをよみました。」
【論語学習への関心・意義の理解・疑問】	「このろんごは（略）しょうらいわたしがなになるかおしえてみたいです。」

表4 各期のカテゴリー、データおよび文字数

	とまどい・難しさ	課題の達成感	楽しい・好き・感動・カッコいい	行動目標としての内面化	素読の快感・活性化・落ち着く	実体験の内省	教師・学校への信頼・感謝	論語学習への関心・意義の理解・疑問	カテゴリー総数	1記述あたりのカテゴリー数	1回答あたりの文字数
第1期	6	25	18	27	1	0	1	1	79	1.16	14.8
第2期	7	46	40	66	21	10	13	21	224	1.11	17.8
第3期	15	22	42	59	11	20	12	29	210	1.22	23.5
第4期	7	20	30	44	16	15	13	30	175	1.33	26.4

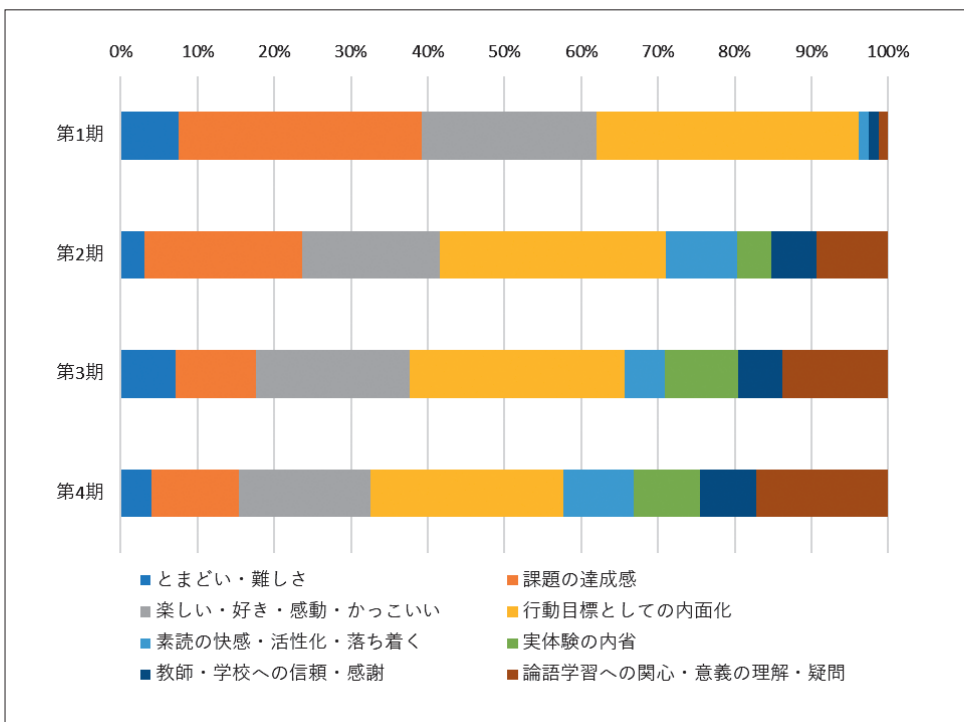


図9 各期におけるカテゴリーの比較

第1期から第4期の変化として、明らかに比率が小さくなっているのが【課題の達成感】である。「できた」「よめた」等、暗記や素読の分量や巧拙についての自己評価であり、データ数は減っていないが、他のカテゴリーに該当する記述が増えたため、比率が下がっている。

【素読の快感・活性化・落ち着く】、【実体験の内省】、【教師・学校への信頼・感謝】の3つのカテゴリーは、第1期には全くあるいはほとんどみられなかったが、第2期から増え、【楽しい・好き・感動・カッコいい】と【行動目標としての内面化】と共に、一定の比率を保っている。

【論語学習への関心・意義の理解・疑問】は「もっと知りたい」「どうして?」「ろんごをよんでよかった」など、学ぶことそのものへの主体的な意欲や理解が示されたものであり、期を追うごとに比率が高くなっている。

3) 保護者からのコメント

児童の家庭での様子について把握するため、1年生の保護者3名に依頼して、論語に対する子供の取り組み方の変化について記述してもらった。その中の一つを示す。

「入学当初からの論語のふりかえりを見直してみると、6月ころまでは『よみました』という内容を書いていた娘が、7月より論語の内容・意味を自分なりに理解し、感想を記していることに大きな成長を感じています。論語を読んで、『私もこうなります。』『こうなれるように頑張ります。』だけでなく、実際の生活の中で、反省することやこうしておけばよかったと思うことを論語の学びを通して気付いているように思います。『ろんごをよむと、ころがおちつきます。』と娘が感想を書いていたことがあります。この感想には、私も驚きました。と同時に、とても嬉しくなりました。これからも、親子で一緒に沢山の論語を読んでいきたいと思います。」

V 考察

本研究のリサーチ・クエスションは、(1) 論語の教えや魅力を、小学生に効果的に伝えるにはどのようにしたらよいか、(2) 論語を基にした総合的な実践は児童の人格的成長にどのような効果をもたらすか、の2点であった。本節では、まず(1)への回答として、本実践の特徴について述べる。次に(2)への回答として、本実践の児童の人格的成長に対する効果について述べる。

1 本実践の特徴

本実践の特徴は、以下の5点に整理される。

1) 短いことばで示す

本実践では、論語指導士養成講座の研修を参考に、毎週短い句を一つだけ選んで提示した。そして「素読」あるいは「唱和」を繰り返すことを重視した。この方法によって、低

学年の児童にも読みやすく、覚えやすく、心に響きやすいものとなった。1年生児童の「気持ちいい」「落ち着く」という感想には、これが身体的・心理的な快の感覚を伴う全人的な学習方法であったことが示されていると考えられる。

2) 手作りプリントと墨書を配付・掲示する

二つ目の特徴は、第一筆者が独自に作成し、毎週配付したプリント（図4、5、7、8）と、そのベースにもなった自筆の墨書である。1)で挙げた短いことばで示すことと同様に、論語指導士養成講座での研修を参考にした。既存の教材ではなく自作したものを使用することによって、児童も「校長先生の論語」「校長先生の習字」と呼ぶなど、注目しやすく、身近に感じやすい効果があったと考えられる。

3) 発達段階に応じた資料および講話法を工夫する

一見難解な論語の内容をどのようにわかりやすく伝えるか、総合的な学習としてどのように発展させるかということは、実践開始前から課題としていた点であり、特に小学生は学年間で発達課題が大きく異なるという難しさに対応する工夫が必要であった。そこで新年度開始時には1年生だけ別のプリントを作成する、その後は5・6年生用に文字数を増やしたプリント（図5、7）を作成したり、緒方洪庵と感染症というテーマで講話を行ったりと、学年ごとに最適な資料と講話内容を調整していった。

4) 児童の学習機会を多層的に構成する

本実践では、(1)朝の「就実タイム」で、クラス担任の指導による論語の素読を行う、(2)毎週1枚ずつのプリントを用いた個別学習と校長によるコメント記入を通じた対話を行う、(3)1か月半に1回のペースで各クラスの「就実タイム」を校長が訪問し、児童の前に立って素読や講話などを行う、という3つの活動を軸とした。(1)と(2)を毎日、毎週繰り返してリズムを作り、そこへ(3)がある意味で特別な時間として加わることによって、学習が単調な反復やマンネリにならず、児童がモチベーションを保つことができ、様々な話題につなげやすくなった。

5) 弾力的で柔軟な展開を試みる

本実践はあらかじめ入念な準備をし、計画を立てて始めたが、当初の案にこだわることはせず、児童の実態や反応から学びの進展度合いやニーズを把握し、その時機にふさわしい論語を選択するようにした。そして児童のフィードバックや社会的状況から次の講話内容を発案した。そして感染症の問題（Ⅲ-4）、お年寄りからの手紙（Ⅲ-5）など、その時々学校の内外の状況と結び付けていった。そのようにして、中国の古典である論語のエッセンスが、現代日本を生きる自分たちの生活と本質的に通底するものであることが児童に理解されやすくなった。このような柔軟な展開は、1)で挙げた短いことばでの提示

や2)で挙げた手作りの資料の使用によって、児童の反応や社会的状況に即した臨機応変な対応がしやすかったこと、4)で示したような多層的活動により、担任教員も指導に関与していることで意見が得られやすかったこと、そして校長と児童の直接的な交流から、児童のなまの反応をキャッチしやすかったことの相乗効果によって可能になったと考えられる。

2 児童の人格的成長に対する論語の効果

校長が自ら論語を素読し模範を示し、児童は目と耳と心で聴き、声に出して読み、自ら考える。そして自分の生き方を内省し、文字等で表現する。本実践はその積み重ねである。

本実践を始めた頃は「受動的」な児童が多く、できた／できないという、与えられた課題をこなすための価値基準だけでとらえた反応が多かった（【課題の達成感】）。

しかし、それから約半年間継続することにより、児童の反応は「論語が好き」「楽しい」（【好き・楽しい・感動・かっこいい】）へと、さらに論語の学びを自らの生活体験を振り返って理解する思考（【実体験の内省】）へと変化している。つまり「主体的」に取り組むようになり、発達段階に応じて論語を理解するようになってきている。

さらに、【論語学習への関心・意義の理解・疑問】をもち、「よりよくなりたい」「君子（人格者）になりたい」という気持ちをもつ児童が増えてきている。

「私は、この論語を読んで人格者になりたいと思いました。わたしもみんなから尊敬されたいです。私も人格者に近づきたいです。」

「先週に続き、この1週間も『今週の論語』を意識して過ごすことができました。」

毎週の論語プリントに上記のような「ふりかえり」を書く児童が増加している。

また、一人一人の児童に寄り添い、日々の指導を行っている学級担任は、論語の効果について次のように述べている。

「日々の生活目標と論語が結びついていることもあり、帰りの会で1日のふりかえりをする上でとても効果的である。論語のいろいろなフレーズが指導に役立っている。論語は児童にとって心のよりどころであり、人への接し方や生活していく上での指針である。（1年学級担任）」

「道徳の時間に、『このことは論語で習ったことがあるなあ。』という声が児童の方から出てくることがある。児童は論語をよく覚えており、論語を道徳的価値と結び付けてとらえ、論語の教えを意識しながら生活するようになってきた。（3年学級担任）」

児童の人格的成長において、学校内で最も重要な役割を果たしているのは学級担任である。本実践も学級担任の協力がなければ行うことはできない。上に示したような児童や学

級担任の声には、このような長期間にわたる地道な取り組みが、児童一人一人の人格形成において有効であるということが示されていると考えられる。

3 まとめと今後の課題

今回の実践を通して、さまざまな成果と課題が明らかになった。今年度の成果と課題を基に、来年度以降も本実践研究を継続し、講話等の内容や方法において工夫改善を図り、児童の意識の変化についての検討を蓄積していく予定である。また、特に本年度初めて論語にふれた1年生児童に焦点を当て、縦断的に人格的成長のプロセスを追っていくことを計画している。

VI おわりに

どの子も 子どもは星

みんなそれぞれが それぞれの光をいただいて まばたきしている

ほくの光を見てください と まばたきしている

わたしの光も見てください と まばたきしている

光を 見てやろう まばたきに 応えてやろう

これは『村を育てる学力』の著者であり、日本を代表する教育者である東井義雄先生(1991年4月死去)の詩⁹⁾である。本校の児童も、同じように毎日まばたきをしている。毎週児童が提出する論語プリントに校長自ら赤ペンで花丸を入れて返す。これは、校長と児童の心のふれあいである。「倦(う)むなかれ」。この言葉を胸に、今後も実践研究を進めていきたい。

謝辞

本研究実践を進めるに当たり、ご協力いただいた関係者の方々に深く感謝申し上げます。

引用文献

- 1) beボンキッキーズ。(2013)。beボンキッキーズの論語ー子や孫と読みたい日常語訳。産経新聞出版。
- 2) 加地伸行。(2004a)。論語ービギナーズ・クラシックス 中国の古典。角川ソフィア文庫。
- 3) 加地伸行。(2004b)。論語 全訳注。講談社学術文庫。
- 4) 加地伸行。(2009)。論語 増補版 全訳注。講談社学術文庫。
- 5) 加地伸行。(2015)。論語のこころ。講談社学術文庫。
- 6) 岡山県教育委員会。(2014)。学校教育で活用できる論語章句集。
<https://www.pref.okayama.jp/page/380794.html>
- 7) 論語教育普及機構(一般社団法人)。(2018)。論語指導士養成講座。

https://www.youtube.com/channel/UC7h_Cr9PXu-_2B241j1aAew

- 8) 立花隆. (2009). 情報を手に入れて未来を拓こう－世界を見る目をもった人・緒方洪庵. 立花隆・関川夏央・松本健一. 未来をつくる君たちへ－司馬遼太郎作品からのメッセージ. N H K 出版. pp. 25-48.
- 9) 東井義雄. (2007). 米田啓祐・西村徹 (編). 東井義雄一日一言. 致知出版社.
- 10) 「超訳! こども名著塾」編集委員会. (2018). 超訳! こども名著塾 1 〈論語〉孔子〈老子〉老子. 日本図書センター.